ふとんの中で「花の街」　　住山一貞

戦争が終わって一年少し、三年生の三学期に帰ってきました。東京に帰ってきたと書きたいところですが、父は終戦で失職し前に住んでいた社宅には帰れませんでした。幸い神奈川県庁に職を得て、川崎の臨時官舎に入りました。官舎といっても、つぶれた飛行機部品会社の独身寮で、12畳一間に家族5人、廊下が炊事場兼煙突という大変な生活でした。

私は体が弱く、よく熱を出して学校を休みました。朝は良いのですが、夕方から夜になると熱が出るのです。結核が心配されましたが、何度検査しても、陰性でした。まだろくに本もなく、勉強するのもばからしく、布団にもぐってラジオを聞くのが唯一の「ひまつぶし」でした。「私の本棚」がお気に入りの番組でしたが、その後か先に「婦人の時間」があって、そのオープニング曲が「花の街」でした。（曲名は知りませんでしたが）特に前奏の上昇する音程が好きで、布団にくるまって目をつぶると、空を漂って行くような感じがしたものです。そのあと「配給便り」「尋ね人」があって「天気予報」が終わると12時で「ニュース」、待望の昼食—「おかゆ」と「梅干し」か「オカカ」、たまに卵程度—でした。

それから数十年後、サラリーマン時代の昼休みの楽しみは「日経」の「私の履歴書」を読むことでした。1990年前後、団伊玖磨氏が登場し、この曲の生まれた、いきさつが書かれていました。昭和20年代、氏は柿の木坂か碑文谷あたり（忘れてしまいました）に住んでおられ、隣にNHKに務める娘さんが居られたそうです。あるとき垣根越しに歌詞を渡され、それに作曲した作品が採用されて「花の街」が生まれたというのです。初放送は昭和22年で、氏の実質的なデビュー作となりました。私は、この曲が自分のテリトリー（既に目黒区に住んでいました）で生まれたと知って、より親しみを感じるようになりました。

作詞は野間章子さん（世田谷名誉区民）ですが、1、2番で戦争が終わって平和な世の中が来た喜びを、3番は戦争で喪われたものへの悲しみを表した、したがって必ず3番まで歌ってほしいと言われていたそうです。なお、歌詞には多少異説が有るようです。

調べていたら、団伊玖磨氏について、さらに発見がありました。これは次回とします。